

京都市教育長賞

支え合いのバトン

京都市・京都市立西陣中央小学校 六年

中村 倭悠なかむら じゆう

「ゴミを拾う」という言葉だけを聞くと当たり前のごとく思うけれど、街の中に散らばる他人が捨てたゴミを実際に自分が拾うとなると当たり前に出来るのかな。僕の住む地域にゴミが少ないのは、きっとその当たり前ではないことを日々当たり前のように見えないところで取り組んでくれる人々がいてくれるからだ。

ある朝、朝早くからゴミ拾いをする地域の人々をたまたま見かけたことをきっかけに僕の父は、毎朝近所のゴミ拾いを続けている。初めの頃、ゴミ拾いの用トングを持ってタバコの吸殻や飲みっぱなしの缶、放置された犬のフンなど持ち帰る父の姿を見て、汚いものを拾うのは嫌じゃないのかな、案外ゴミが落ちていたのかな、どうしてそのままにして立ち去ってしまったのだろうか、普段考えもしなかったことが気になるようになった。

学校の長期休みをきっかけに、父に誘われて時々だけでも一緒にゴミ拾いに行くようになった。実際に自分で体験をしてみても感じたことは汚いものを拾うのはやっぱり嫌だなということ。拾うのをためらってしまうゴミも結構ある。父に聞くと同じだったのだからちょっと安心した。でも、そんな時ほど見過ごさないように自分に気合いを入れるようだ。ゲームに例えると、ラスボスに出会ったときに奮い立たせる気持ちになることなんだろうと思うけれど、なかなかしんどい。でも、目についてしまったゴミが無くなりその場がきれいになると誰かに喜んでもらえたらいいなと思え、「ありがとうね。」なんて声をかけられるとこんな僕でも少し役に立てたのかなと嬉しくなる。

不思議なことに、ゴミがある場所にはゴミが多い。ゴミがない場

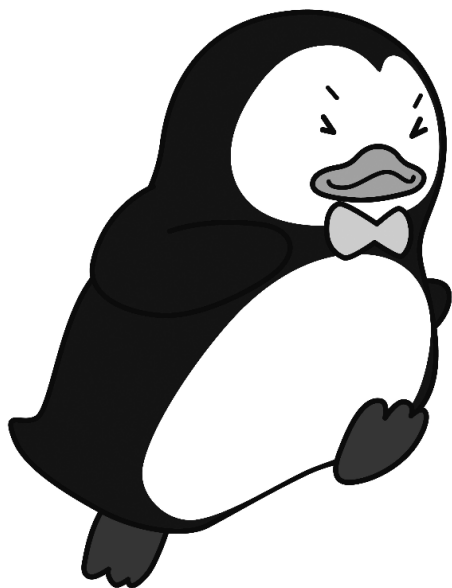
所にはゴミがない。まるでゴミがゴミを呼び寄せるようだ。ゴミが落ちてくるから自分も捨てていいかなとか、この陰になら捨てても大丈夫かなとか、ちょっとぐらいいなら心の甘えが出やすくなるのかもかもしれない。また、必ず同じ場所に繰り返しあるタバコの吸殻などは毎日同じ人が捨てているのだろうかと思える。

なんだか面白いことに、ゴミ拾いをしていっているとどこかゴミを捨てたのかその人を想像してしまう。辛いことがあってここでお酒を飲んだのかな、たまたま捨てるものが無くなって犬のフンがそのままになったのかな、お菓子をみんなで食べて盛り上がり過ぎたのかな、捨てたのではなくて落とし物なのかな、風で飛ばされたのかなとか、もしかしたらその人なりの理由があったのかもかもしれないとぼんやり考える。

ゴミを拾うことで、知らない誰かのことを考えることにおどろいた。今まで気にしたことなかった同じ地域の人々のことを。ゴミを捨てる人の気持ち、朝早くからいつもゴミ拾いをしてくれる人の気持ち、ゴミがない公園で安心して遊びまわる小さな子どもたちなど、地域の中の知らない誰かのことを想像することは、なんだかその人との距離が近くなるように思った。知らない人なのに、知っているような人になる不思議な感覚だ。

今回、社会を明るくする運動ってどんなことだろう、なんだか難しくそう僕に出来ることなんてあるのだろうかと考えて悩んだけれど、ゴミ拾いから地域がきれいになり、地域の人を想像しながら支え合うことはもしかしたら社会が明るくなるきっかけの一つなのかもしれないと思った。

誰かのために地域のためとする行動は、きれいな場所が生まれ、人を想い合う温かい気持ちの流れ、その地域に住む人々が安心して暮らせる空気が広がるように感じる。その空気を感ずることが出来るかなとなくちゃんと思いたいと思いたいと思いつき、まいつかではダメだよなという気持ちが出てくる。



きっとまだまだ僕が気づけていない地域の人々の当たり前かもしれないけれど、誰もが当たり前に行動があるのだろう。その人々のおかげで僕は安心して過ごしている。少しずつでも興味や関心を広げて、僕も地域の一人として支え合いのバトンを繋いでいけたらいいと思う。

僕は、「今日もどこかで誰かが支えてくれている。」と知ることが出来てから、なんだか守られているようで、安心して嬉しくて心が少し明るくなるような気持ちになった。そんな風を感じる空気が流れる地域が増えることで、世界中が明るい社会になるといいなと願っている。



“社会を明るくする運動”は、
犯罪や非行のない明るい社会を
みんなで考え、作っていこう
という運動です。
何ができるかな
一緒に考えてみようよ



京都市教育長賞

僕の身近にあった「社会を明るくする運動」

京都府・京都市立中京中学校 二年 坂植 さかうえ 伸平 しんへい

中学二年の夏休み、僕は「社会を明るくする運動」についての作文を書くことにした。ポスターを見ると「#生きづらさを生きていく」とある。テーマとしては犯罪を防止したり、罪を犯した人の立ち直りについて考えたこと……とある。何だか難しそうだ。

早速母に相談してみた。「社会を明るくする作文、どんなことを書いたら良い？」と。すると母は「更生保護施設で知ってるか？」と言った。僕は知らなかったので早速調べてみた。ネットで調べると刑務所出所者などを受け入れて自立に必要な指導や援助を行う施設とあった。更に母は「家のすぐ近くにあるんやで。ほら、去年の年末に私、ヴァイオリン弾きに行ってたやろ。」そう言えば昨年のクリスマスに母はヴァイオリンの演奏をしに行ってたなと思った。「あれはな、更生保護女性会の人達が更生保護施設の寮生さんにクリスマスを楽しんでもらうためにお料理を作ったりチキンやケーキを用意したりしてはるんや。私はいつも一緒にピアノの伴奏してくれてはる人が女性会に入らはって、ピアノもあるしたまた一緒に演奏することになったんや。」

その後、僕の家の近くに「盟親」という更生保護施設があることを教えてくれた。前はいつも通っているがそういう施設であることは知らなかった。この作文のテーマが無ければ僕も意識して母に質問しなかったと思う。施設での去年のクリスマス会の演奏は好評だったそつで母は今年のクリスマスにも一緒に演奏するらしい。そして母から、僕が小さい頃から所属しているボーイスカウトの副長は更生保護女性会の一員として活動していることも教えてもらった。

「社会を明るくする運動」や「更生保護施設」言葉だけ聞いていると何だか縁遠いような気がしていたけど、身近で知っている人が関わっているということが分かると一気に親近感が沸いた。そこで母との会話から思ったことは「何も特別じゃない」「身近なことであると感じること」の大切さだ。

ふとした心の隙や孤独、ポスターに書いてあるように「生きづらさ」と感じることは誰でもある。僕も去年、体調不良も重なり学校に行くのがしんどい時期があった。「頑張ろう」と思うけど頑張れない。そんな自分は悪いことしているように思い、心が痛くなる。そんな時期をひとまず乗り越えることが出来たのは、家族だけでなく担任の先生や部活の顧問の先生がいつも声をかけてくれることだったり、友達が話を聞いてくれたことだったり、学校以外の場所での先生や大人が見守ってくれていたこと、何でもない話が出来たこと、そういった小さなことの積み重ねだったと思う。自分自身の体験と今回の「社会を明るくする運動」について話したことから初めて気付いたことがある。

「社会を明るくする運動」といっても特別なことをするのではなく、例えば今回母との話のように更生保護施設が近くにあること、そこに自分も良く知る身近な親しい人が支援の活動をしているというところを知ること。自分の体験や感じたことに置き換えて考えてみる。本当にそんな小さなことで良いのだと思う。

では僕はどうしていきたくないか、何ができるか。それはまだ分からない。けれども失敗したり、しんどい時があっても何とか頑張っていける、それが受け入れられる地域や社会であって欲しいと思う。そのために僕ができることを探していきたいと思う。まずは何でも身近に感じる。そこがスタートラインだと思つ。